

能界展望(平成12年)

ヤマナカ, レイコ / YAMANAKA, Reiko / 山中, 玲子

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

26

(開始ページ / Start Page)

175

(終了ページ / End Page)

185

(発行年 / Year)

2002-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020572>

能界展望（平成十二年）

山中 玲子

概観

平成12年11月、文化財保護審議会は、ユネスコの「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」の候補として能楽を推薦することに決定した（13年には認定）。この件に関しては正式に認定された13年の能界展望で詳しく触れることになろうが、この時点で能楽は、日本の誇る文化遺産であることを世界に向けて公式に宣言されたことになる。

一方、1月4日の毎日新聞企画特集「教育とインターネット」には「伝統芸能ネットで身近に」のタイトルで、文化庁が取り組む「文化デジタルライブラリー」に関する記事が大きく載せられている。国立劇場、国立演芸場、国立能楽堂、国立文楽劇場、新国立劇場での舞台公演を最新デジタル技術によって保存し、教育用に使いやすい形にしたうえでインターネット等で配信して、学校教育の現場で活用してもらおうという計画だそうである。肖像権等の問題もあるだろうし、現場の先生たちがどう教えるかという点もきちんとしたサポートが必要と思われるが、子供の頃から伝統芸能に触れる機会を増やしてくれる企画として歓迎すべきことだろう。

また、こうした国を挙げての大きな企画とは別に、能・狂言関係団体や個人が開設した能楽関係のホームページも盛んで、能楽入門的な知識や個々の会の公演日程、観賞後の意見交換等、様々な情報がインターネット上で飛び交っているのがわかる。

伝統芸能の能楽の世界にも、現代社会のキーワードである国際化とITは、しっかりと影響を及ぼしているということである。となるとやはり、著作権・肖像権をどう扱うかという問題は、能楽界全体の方針として、早急に検討し結論を出さねばならないだろう。いつの間にか写されていた舞台写真が無断で世界中に流され二次利用・三次利用されるというのも困るが、かといって、歌舞伎の世界のようにあまりに厳しくなってしまうと、世界各地の研究者・教育者や、日本文化に理解と共感をもっている人たちが画像を利用することが実質上不可能になってしまう。長い目で見て能楽界全体の発展につながるような、建設的で柔軟な方針を立ててもらうことを切望する。

外側が動いているというだけでなく、能楽界の内側に目を向けても、やはり時代は移っているという印象が強い。戦後

の能界をリードしてきた観世鍔之亟氏の逝去は深い哀しみとともに、一つの時代が過ぎていったことを感じさせずにはおかぬ出来事だった。築百三十余年を数えた京都室町の金剛能楽堂が新築移転のために閉館したのもこの年である。

その一方で、中堅・若手能楽師たちが次々とグループを作り新しい試みに取り組んでおり、また、野村万蔵家では、襲名・改名が相次いだ。個人の会や新しい企画の発足、他分野の芸能との交流等もいろいろと試みられている。全体として「世代交代」を感じることの多い年だったように思われる。

以下、記録を中心に項目別に平成12年の能楽界の概要を述べるが、網羅主義は取っていないこと、敬称は原則的に省略させて頂いたことを、初めにお断りしておく。

さまざまな催し

本年も、特色のある公演が数多く企画された。観世会(明治33年一三世宗家観世清廉が発足)は創立百周年を記念して「日賀寿能」(5月5〜7日)、「初心不_レ可_レ忘 六百年 能楽鑑賞会」(3月21日)、「蠟燭能」(8月6・7日)等の特別公演を行った。日賀寿能は三日とも安宅(小書は日替り)・羽衣(彩色之伝)・道成寺(小書は日替り)を中心にしたプログラム。また「浅見真州の会」での独演五番能(10月15日)も話題を呼んだ。翁(父尉延命冠者之式)・邯鄲(夢中醉舞)・清経(恋之音取)・半蔀・卒都婆小町(一度之次第)・石橋(獅子十二段之式)に狂言(昆布柿・呼声)も加わり、午前10時から午後7

時過ぎまでの長丁場だったが会場はほぼ満員だったようだ。

もちろん能界の活動の中心をなしているのは、こうした華やかな話題性の高い催しではなく月次の会や定例公演などであり、そうした地道な成果の積み重ねが能界の発展にとって最も重要であることは言うまでもないが、ここではそれらを個別に紹介する余裕がない。いささかアンバランスな気もしないではないが、以下では新作・復曲活動、海外や他領域との交流等を中心に取り上げていく。

「新作・復曲活動」

復曲・新作能の試みは、もはや日常茶飯事と言ってよい。以前に復曲された作品の再演もさかんである。最近の新作・復曲活動は能楽師主導型が多いのも特徴の一つだが、誰でもが手がけているわけではなく、役者の顔ぶれはほぼ決まっているようだ。以下、催しごとに、上演月日・上演場所・公演名・出演者(抄録)・特記事項の順で列記する。

◎復曲能(鐘巻)の再演

1月22日。名古屋能楽堂。花傳の会(藤田六郎兵衛主催)。大槻文蔵・中村彌三郎・茂山千之丞・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村大・前川光長他。92年に能楽研究所創立四十周年記念として復曲上演された(鐘巻)に新たに手を加えて再演。2月の(道成寺 替装束)、3月の(道成寺 赤頭・中之段数廻・無廻之崩・五段之舞)と続く連続公演の初回に(道成寺)の原作にあたる(鐘巻)を上演した形。

◎(長柄の橋)の復曲

2月26日。大槻能楽堂。大槻能楽堂研究公演。片山九郎右衛門・中村彌三郎・藤田六郎兵衛・荒木賀光・山本孝・三島元太郎他。制作スタッフとして、大阪からは大槻文蔵・天野文雄・大谷節子・小林健二(大槻氏以外は研究者)、京都からは片山慶次郎・片山清司・味方健・味方玄が参加。

『能楽タイムズ』6月号に石淵文栄氏が寄せた「復曲能『長柄の橋』をめぐる」と題する文章には「研究者には、自分たちの研究の成果を舞台上で形にしてみたいという欲求がある。役者の側は、舞台にかけて面白くなければ意味がないと思う。納得せずに譲歩すれば、中途半端なものしか出来ない」とあり、演能当日のパンフレットにある九郎右衛門氏の文章からも、研究者と役者の主張がかなり激しくぶつかったことが想像できるが、それは石淵氏が書かれているように「舞台を創つてゆく過程として誠に健全なあるべき姿」なのだろう。ぶつかるのが面倒だから役者だけでやろうとしたり、逆に研究者の言う通りに動いてくれる役者だけ組もうとするのではなく、心身ともに消耗することを覚悟で、それだけの苦勞と引き替えにする価値のある復曲をおこなっていくのが理想と思う。なお『長柄橋』は、11月7日の「龍吟の会特別公演」で同じメンバーによる再演を行っている。

◎新作能(夢浮橋)

3月3日・4日。国立能楽堂。国立能楽堂特別公演。梅若六郎(阿闍梨)・金剛永謹(勾宮)・梅若晋矢(浮舟)・山本順之(地頭)・一噌隆之・大倉源次郎・亀井広忠他。瀬戸内寂聴作。

装束デザインは植田いつ子。源氏物語の宇治十帖を題材にした物語で、観世・金剛の異流共演に声明(天納久和)が加わった構成。横尾忠則デザインのポスターも話題を呼んだ。

◎新作能(原城)の再演

7月22日。原城跡(本丸)特設舞台。原城一揆まつり薪能。観世喜之・観世喜正・遠藤六郎・遠藤喜久・鈴木啓吾・一噌隆之・飯田清一・亀井広忠・観世元伯他。島原の乱が題材。堂本正樹作。95年に長崎観世九阜会及び国立能楽堂で上演。

◎新作能(大坂城)

7月26日。大阪城西の丸庭園。大阪城薪能。梅若六郎(淀君)・大槻文蔵(千姫)・赤松禎英(真田幸村)・茂山千之丞・茂山千五郎・野口傳之輔・久田舜一郎・山本哲也他。大阪城薪能の第二十回記念。堂本正樹作。大槻文蔵・武富康之節付。淀君の着ける面は新作を一般から公募して使用するという企画も話題になった。

◎新作能(伽羅紗)の再演

9月7日。国立能楽堂。大倉流祖先祭能(大藏源次郎主催)。観世暁夫・梅若六郎・梅若晋也・山本東次郎・大倉源次郎・藤田六郎兵衛・亀井広忠・観世元伯他。97年初演。

◎《花軍》の復曲

9月23日。大阪能楽会館。大倉流祖先祭能。金剛永謹(女郎花)・大槻文蔵(翁草)・茂山千三郎・野口傳之輔・大倉源次郎・山本哲也・上田慎也他。金剛永謹台本監修、宮本圭造台本制作、大槻文蔵節付・演出。

◎〈泰山木〉の復曲

10月4日。大槻能楽堂。復曲泰山木を観る会(福王茂十郎主催)。観世清和・梅若六郎・福王茂十郎・福王和幸・茂山千三郎・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・山本哲也・上田悟他。

「世阿弥時代の同音・地謡による」と銘打った上演。「同(音)」は登場した役者一同の合唱として「地(謡)」とは区別し、ワキが地頭の役割も兼ねる。天女舞は禅鳳伝書からうかがえる形を基にする。企画協力と当日の解説・天野文雄。謡本作成・石淵文栄。

◎豊公能〈吉野詣〉の復曲。

11月15日。岐阜県安八郡墨俣町・墨俣一夜城址。観世栄夫・大槻文蔵・赤松禎英・飯富雅介・杉江元・佐藤友彦・井上祐一・井上靖浩他。関ヶ原合戦四百年記念行事の一環。改作・堂本正樹、節付・大槻文蔵。

◎その他

*新作狂言〈新能〉

3月24日。矢来能楽堂。梅若猶彦他。梅若猶彦作・構成。禅竹十郎演出。シテ方・狂言方・囃子方・内弟子等が登場し、新能 公演の舞台裏を描く。

*新作能〈実朝〉再演

4月1日。浦田後援会能。京都観世会館。シテ・浦田保利。

*新作〈関白一条教房〉の再演

4月20日。河村能舞台。シテ・河村信重。11年10月に初演(野村万之丞作詞)。演出・河村信重。

*創作能〈日輪月輪〉

5月20日。新潟市民芸術文化会館。良寛百七十年祭。河村信重他。良寛と聖サンフランチェスコの物語を能に仕立てたもの。

*現代語能〈クレオパトラ〉

8月19日。新国立劇場小劇場。津村禮次郎他。津村禮次郎作。現代語能の三作目。シェークスピアの「ジュリアス・シーザー」「アントニーとクレオパトラ」を踏まえ、クレオパトラ側を能の形で、ローマ側を新劇の俳優によって演ずる。

*新作謡〈按針讃歌〉

9月30日。横須賀市役所逸見行政センター内「逸見公民館」集会室。三浦按針来日四百年を記念する講演会と併せて披露。原作・美津口武夫、補作・杉山六郎、節付・鈴木佐太郎。

*新作狂言〈附子よりブス〉の再演

10月25日。国立能楽堂。千之丞の会。茂山七五三・茂山あきら。脚本・岡本さとる。演出・茂山千之丞。

*創作能〈高山右近〉

11月18日。名古屋能楽堂。名古屋市民芸術祭2000年主催事業。シテ・梅若猶彦。加賀乙彦作。『能楽の友』掲載の番組によると、能本来の地謡や囃子(笛は三管)の他、フルート、ハープ、チューラル・ベル等の洋楽器と女声合唱が加わるようだ。

「海外公演・他領域との交流」

海外公演も相変わらず盛んである。能楽の海外公演が一つも行われない年はない。また、国内国外を問わず能楽への関心が高まるにつれて、能楽と他の舞台芸術との交流も盛んになってきている。いわゆる「競演」の形式だけでなく、能や狂言が伝承してきた技術や演出上の工夫を他分野の芸術と融合させ、あるいは併行して舞台に乗せる試みもいくつか行われているので、以下、併せて列挙する。

◎米国ミネソタ州で能楽公演

7月28・29日。米国ミネソタ州ミネアポリス郊外のブルミントン市。ノルマンデル大学の講堂劇場。演目は舞囃子〈高砂〉・狂言〈神鳴〉・能〈葵上 梓之出〉。英語による、能楽についての解説や、やはり解説付きでの能装束着付のデモンストレーション等も。杉浦元三郎・杉浦豊彦・河村晴久・片山伸吾・安東伸元(狂言)他。

◎喜多流能楽団ドイツ・フランス公演

9月26日～30日、シテ方喜多流の狩野琇鵬を団長とする能楽団(塩津哲生・狩野了一・山本則俊他)が、ドイツのシュパイヤー市(シュパイヤー大聖堂)、ハイデルベルク市(シュベツイン城)、フランスのエクスプロバンス市(狩野氏が以前寄贈した能舞台)で上演を行った。演目は、翁・絵馬(半能)・羽衣・土蜘蛛・寝音曲・棒縛等。

◎日蘭交流四〇〇年記念梅若会ヨーロッパ公演

12月3日～11日、日蘭交流400周年を記念した能公演が、オ

ランダ・フランス・ベルギー3カ国5都市で催された。演目は、新作能〈空海〉・新作能〈伽羅紗〉・〈土蜘蛛〉。出演は、梅若六郎・梅若晋矢・梅若靖記・宝生閑・山本則重・松田弘之・大倉源次郎・亀井広忠・助川治他。新作能には成田山新勝寺の僧侶による声明、パイプオルガン(奏者・松居直美)も加わっている。

◎日独二カ国語による「清経の死」

7月8日。鍬仙会能楽研究所舞台で、日本語とドイツ語で「清経の死」が演じられた。「日本の伝統芸能に外国語の響きを重ねる」試み。能〈清経〉を題材にし、川出鷹彦(演出家・言語セラピスト)によるドイツ語の演技と、野村与十郎・佃良勝による日本語の朗誦、佃の大鼓を組み合わせた。

◎創作能・バレエ「羽衣」HAGOROMO」

8月31日。東京国際フォーラムホールC。主催・世界芸術文化振興協会、後援・毎日新聞社。ロシアのプリマドンナ、マイヤ・プリセツカヤと宝生流シテ方の渡邊他賀男が、天女の「序ノ舞」をバレエと能で表現するという試み。深見東州総指揮、寺崎裕則演出。

◎コメディ・デラルテと狂言との競演

9月5日～7日、16世紀イタリアの即興喜劇「コメディ・デラルテ」を演ずるスイスの「テアトロ・パラベント・カンパニー」と「茂山狂言」との競演が、国際交流基金フォーラム赤坂で催された。演目は狂言〈梟〉(茂山千之丞・あきら・宗彦)とコメディ・デラルテ「すきつ腹の恋物語」。

◎日韓古典芸能祭二〇〇〇

11月12日、横浜能楽堂で「日韓古典芸能祭二〇〇〇」が催され、韓国から古典舞踊、宮廷音楽、パンソリ、仮面劇などの名手（人間国宝三人を含む）が来日。山本東次郎らの狂言〈福の神・茶壺〉と競演した。これは前年に山本らが韓国で〈三番叟〉などを上演したのを受けて企画されたもの。先走る形になるが、翌年の「日韓古典芸能祭二〇〇一」では日本の能と地唄舞、韓国の宮中舞踊や民俗舞踊に北朝鮮の民俗舞踊も加えて、日韓両国同じプログラムで公演を行っており、芸能を通じての交流は少しずつでも前進しているように見える。

◎京劇「太真外伝」と能〈楊貴妃〉の競演。

11月13日～15日、青山円形劇場で。「桜間真理の会」主催。〈楊貴妃〉のシテは桜間真理。

新しい試み・普及のための企画など

能楽の普及のための講座やワークショップ、特色のある催しなど、さまざまな試みがされている。力のある役者が良い舞台を勤めればそれで自然に観客も弟子も増え能楽界も発展する、というような幸せな時代ではないことは衆目の一致するところであり、まず知ってもらい、興味を持ってもらうためのいわば「企業努力」は今後ますます力を入れて行かねばならない部分だろう。

「横浜能楽堂」

数ある催しの中でも、話題性のある斬新な企画という点で

は、横浜能楽堂が突出していたように思われる。

3月28日には「バリアフリー能」と銘打って（橋弁慶（大坪喜英雄他）、柿山伏（山本東次郎他）の上演を行った。介護者一名まで無料。点字による解説・イヤホンガイド・手話通訳・車椅子利用者の駐車場確保、という工夫がされている。他に、別項で触れた韓国の芸能との交流等、企画力のある公演も多かったが、講座や展覧会、能楽教室などにも工夫が凝らされていて目を引いた。能楽研究所が作成したフィルムを利用した講座「映像で見る20世紀の名人」や「能楽師と読む『風姿花伝』」は玄人や研究者にとっても面白い企画だったが、一方では特別展「お菓子で味わう能」のように、従来とはまったく違う方面から能に親しんでもらおうという催しもあった。

「初めての教室シリーズ」は、謡と小鼓がグループ稽古、仕舞と能管は個人稽古で、全10回の教室。「こども狂言ワークショップ」入門編は、小・中学生を対象にした全3回の教室で、狂言の公演鑑賞付き。能や狂言に関して何か習ってみたいけれど敷居が高いと思っている人はたくさんいるだろう。不安や食わず嫌いを取り除き、とりあえず触れてもらうにも、良い企画だったのではないか。従来も似たような形はカルチャーセンターなどで行われていたが、地域の能楽堂が主体ということで、素人弟子を増やすことに重点をおくのではなく、まず能や狂言に親しんでもらおう、能楽堂へ足を運んでもらおう、という姿勢が新しく感じられた。

「新しい会の発足」

こうした観客層の拡大への模索も含め、新しい時代の中で古典芸能とどう取り組んでいくかということは、特に若い演者にとって重大な問題なのだろう。中堅・若手の能楽師・狂言師を中心に新しい会が組織され、さまざまな取り組みが行われている。

京都の大蔵流狂言方、茂山千五郎家の若手狂言師六人(千三郎・正邦・宗彦・茂・逸平・童司)による狂言会。「古典狂言を見つめ直し、自分たちの芸を磨く」ことを目指し、狂言会「TOPPA」を結成、6月30日に京都で、8月8・9・10日に東京で第一回公演をおこなった。

ワキ方宝生流・森常好、笛方一噌流・一噌隆之、太鼓方観世流・観世元伯を同人とし、シテ方観世流宗家観世清和を参与とする「花の会」も結成。10月にワークショップを行い、それを受けて12月23・24日に九州の大濠公園能楽堂で本公演をおこなった。

新たに発足した会ということでは、ともにプロデュース能力の高い藤田六郎兵衛と野村万之丞の主宰する、次の二つも挙げておこう。笛方藤田流宗家の藤田六郎兵衛は「花傳の會を閉会し」、「藤田・龍吟の會」を発足させた(公演については176頁参照)。また、狂言方と泉流の野村万之丞は狂言集団「萬狂言」を結成、2月には「狸腹鼓」を「加賀」の小書付きで上演した。

「対訳でたのしむ」シリーズの刊行

謡本の世界にも、新しい観客層を開拓し引きつけようという動きが生まれている。檜書店の「対訳でたのしむ」シリーズである。『観世』5月号所収の「現代語訳の謡本刊行」(竹本幹夫・三宅晶子)によれば「初めて能を見る人が気軽に手に取ることができるような一番綴謡本の体裁で、開いてみるとあの難解な謡がわかりやすい現代語に翻訳されており、知りたいこともちゃんと書いてあって、そのうえ値段が安い」小冊子を作る企画で、平成12年には、「井筒・高砂・安宅・道成寺・羽衣」の五冊が刊行された。一貫した信頼のおける現代語訳は言葉に関する幅広い知識や深い作品理解がなくてはできない骨の折れる作業で、担当者の苦勞が偲ばれるが、是非続けてもらいたい企画である。

「講座・展覧会など」

7月27日～9月10日、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館では「朝倉氏と戦国に生きた芸能者たち」という展覧会を開催、また11月17日～12月15日には国立能楽堂特別展「江戸時代の能」が開かれた。

講座については、左に学問的な色彩の強いものを三つ掲げたが、それぞれの能や狂言の会でも上演と併せて簡単な鑑賞講座のようなものを開くことも多く、枚挙に暇がない。

◎武蔵野女子大学能楽資料センター公開講座「能と歌舞伎」
9月から13年1月まで全5回。同大学グリーンホール。能と歌舞伎の音楽(羽田昶)、近世初期における歌舞伎と狂言

(今尾哲也)、歌舞伎俳優から見た能・狂言(中村富十郎)、近代における歌舞伎俳優と能(児玉竜一)、能と歌舞伎の技法(横道萬里雄)。

◎第5回法政大学大学院講座 能楽セミナー「『風姿花伝』六百年世阿弥に学ぶ」

10月19日～26日。同大学ボアソナードタワー。世阿弥の詩魂(馬場あき子)、世阿弥の作劇術(味方健)、『風姿花伝』の不思議な沈黙(ジェイ・ルービン)、世阿弥に学ぶ(西野春雄)、世阿弥の音楽(横道萬里雄)、世阿弥の思想(竹本幹夫)。

◎東京国立文化財研究所第31回公開芸術講座「翁の技法―舞う翁・語る翁」

10月31日。矢来能楽堂。講演は「民俗芸能に伝承する翁猿楽の特色」(中村茂子)、「能の翁・舞の異演出」(高桑いづみ)。「翁・十二月往来」(金春安明)、「冠者・父尉」(上鴨川住吉神社)の上演も併せて行われた。

襲名・改名

野村万蔵家では、七世万蔵が初世萬を、野村良介が分家野村与左衛門家を再興して二世与十郎を名乗り、野村史高は二世万緑、野村英丘は二世祐丞を襲名した。

荣誉・受賞など

◎春の褒賞・叙勲(4月29日)

*紫綬褒章 シテ方喜多流 友枝昭世。「多年能シテ方と

して精進し優れた独自の技能を示してよく伝統芸能の発展に寄与した」ことにより。

*勲四等旭日小綬章 笛方一噌流 一噌幸政。

◎秋の叙勲(11月3日)

*勲四等旭日小綬章 小鼓方幸流 曾和博朗。

◎日本芸術院賞(11年度) シテ方喜多流 栗谷菊生。「能楽喜多流の芸および能楽界に尽くした業績」に対して。

◎日本芸術院賞(12年度) シテ方宝生流 近藤乾之助。「能楽界に尽くした業績」に対して。

◎文化功労者 狂言大蔵流 茂山千作。狂言の伝統的な芸の骨格を踏まえ多くの伝統曲を上演する一方、テレビ・映画・新作狂言等の活動により伝統芸能の発展の可能性を発掘した業績を認められて。能楽界での文化功労者は、喜多六平太氏(昭和28年)、近藤乾三氏(同60年)に続き、三人目。狂言方では初の選出。

◎芸術選奨新人賞(12年度) ワキ方宝生流 宝生欣哉。「役柄に応じた的確な対応」や「『コトバ』の強さ・明快さ」が高く評価されて。

◎読売演劇大賞優秀男優賞 狂言方和泉流 野村萬斎。「『子午線の祀り』の知盛の演技」で。

◎第18回京都府文化賞

*功労賞 シテ方観世流 河村禎二。

*奨励賞 狂言方大蔵流 茂山千三郎。

◎京都市芸術功労賞(11年度) 大鼓方石井流 谷口正喜。

◎松尾芸能賞特別賞 能劇の座(代表・堂本正樹)。「能楽を日本の古典演劇として」確立することをめざし、現在の型や演技を見直しつつ多彩な曲を発掘・上演し、「能楽界に大きな刺激を与えると共に優れた舞台を造型してきた」ことに対して。

◎第70回朝日賞(99年度) 馬場あき子。長年にわたる優れた作歌、著述活動と、伝統文化継承にかかわる業績に対して。

◎第71回朝日賞(2000年度) 茂山千作。「天衣無縫の優れた舞台で狂言を庶民の芸能として普及させた」ことに対して。

◎第23回江馬賞 飯塚恵理人。『近世能楽史の研究―東海地域を中心に』(雄山閣出版)の刊行に対して。

◎第22回観世寿夫記念法政大学能楽賞(別記彙報参照)
大倉流大鼓方 山本孝

観世流シテ方・能楽研究者 味方健

◎第11回催花賞(別記彙報参照)
和泉流狂言方 野村又三郎

日本能楽会・能楽協会関係

◎日本能楽会

【役員構成】

《会長》 金春信高

《常務理事》 観世清和 野村四郎 宝生英照 金剛永謹 喜多六平太 宝生閑 金春惣右衛門 茂山千之丞

《理事》 井上嘉久 大槻文蔵 高橋汎 辰巳孝 廣田陞一
大島久見 福王茂十郎 一噌仙幸 寺井久八郎 幸清次郎
宮増純三 亀井忠雄 山本孝 観世元信 野村祐丞

《監事》 藤波重和 一噌庸二

【会員数】(平成十二年十一月八日現在)

総数380名

シテ方 観世178 金春9 宝生35 金剛10 喜多17

ワキ方 高安6 福王5 宝生8 小計249

笛方 一噌6 森田12 藤田1 小計19

小鼓方 幸9 幸清6 大倉6 観世1 小計22

大鼓方 葛野5 高安4 石井7 大倉4 観世0

太鼓方 観世6 金春11 小計20

狂言方 大蔵25 和泉9 小計17

能楽協会 小計34

◎能楽協会

【役員構成】

《理事長》 片山九郎右衛門

《常務理事》 梅若六郎 坂井音重 武田志房 金春安明 寺

井良雄 廣田泰三 香川靖嗣 宝生閑 柿原崇志 山本則俊

《理事》 浅見真州 守屋泰利 亀井保雄 松野恭憲 出雲康

雅 福王茂十郎 藤田六郎兵衛 鵜澤速雄 三島元太郎 貞

光義明 野村万之丞

《理事・東京支部長》 武田宗和

《理事・名古屋支部長》 泉嘉夫

《理事・北陸支部長》 山田太佐久

《理事・京都支部長》 片山慶次郎

《理事・大阪支部長》 大槻文蔵

《理事・神戸支部長》 藤井徳三

《理事・九州支部長》 鷹尾祥史

《理事・事務局長》 瀬山栄一

《監事》 栗谷菊生 檜常太郎

【会員数】 一五〇五名

支部別 東京 645名 名古屋 114名 北陸 84名 京都 169名

大阪 237名 神戸 60名 九州 142名 本部扱 54名

物故者

●大原紋三郎

郷土史家。新城狂言同好会会長。1月27日、脳出血のため新城市民病院で逝去。享年90歳。平成9年度の催花賞受賞者。著書に『新城祭礼能番組帳 上(下)』『新城祭礼能番組帳解説』『新城能楽補遺』

●井上禮之助

狂言方和泉流。名古屋狂言共同社の一員。能楽協会名古屋支部相談役。2月14日、閉塞性黄疸のため、逝去。享年85歳。

●八木康夫

シテ方観世流。2月17日、敗血症のため大阪市浪速区の愛染橋病院で逝去。享年75歳。大正13年10月3日、大阪市北区に生まれる。昭和13年、山本博之に入門。同年〈海人〉の子方

で初舞台。59年〈卒都婆小町〉、平成4年〈鸚鵡小町〉、6年〈定家〉を披露。日本能楽会会員(昭和50年以来)。

●塚本哲也

シテ方観世流。3月3日、急性心不全のため京都市の京都四条病院で逝去。享年85歳。大正3年7月10日、滋賀県神崎郡に生まれ、昭和6年、杉浦友雪に入門。23年〈乱〉、38年〈道成寺〉、59年〈砧〉を披露。日本能楽会会員(昭和53年以来)。

●宝生公恵

シテ方宝生流。4月30日、クモ膜下出血のため逝去。享年64歳。昭和10年、一七代宗家宝生九郎重英の四女として生まれ、女流能楽師として活躍された。

●石倉耕春

能面作家。本名石倉清。6月10日、肝硬変のため大阪市浪花区若弘会病院で逝去。享年66歳。昭和9年4月8日、京都市に生まれる。31年北澤如意に師事。33年、金剛流豊嶋弥左衛門より雅号耕春を拝命。能面の新作、古面の写し・修理等の傍ら、講演会や実技講座などの講師としても活躍された。

●観世鍔之丞

シテ方観世流。鍔之丞家当主。本名静夫。7月3日、肝不全のため東京都港区の病院で逝去。享年69歳。昭和6年1月5日、七世鍔之丞(雅雪)の四男として東京に生まれ、祖父華雪(六世鍔之丞)、父雅雪、兄寿夫に師事。若年の頃から寿夫・栄夫とともに観世三兄弟と呼ばれ、戦後の能を担ってきた一人だった。

昭和9年〈鞍馬天狗〉花見で初舞台。初シテは13年〈合浦〉。

25年「能楽ルネッサンスの会」結成に参加。三島由紀夫作「綾の鼓」、新作能「智恵子抄」、「天守物語」等に出演。また、45年には「冥の会」を結成、ギリシャ悲劇やベケット等も演じ、ジャンルを越えた演劇活動を繰り広げた。55年に八世観世鍔之丞を襲名。寿夫亡き後の鍔仙会を束ね、後進の育成にも力を注いだ。56年「申楽乃座」結成。53年〈卒塔婆小町〉、60年〈檜垣〉、62年〈鸚鵡小町〉、平成2年〈姨捨〉を披演。「世阿弥自筆本による雲林院」(57年)、「三山」(59年)等の復曲・改作上演、ベニス国際演劇祭(昭和29年)・日本能楽団(同44年)・世阿弥座(昭和47年)・平成5年、計6回等の海外公演でも幅広く活躍した。著書に『ようこそ能の世界へ 観世鍔之丞能がたり』(暮らしの手帖社・平成12年)。平成7年には観世流シテ方初的重要無形文化財個人指定保持者(人間国宝)に認定。同9年紫綬褒章受章。

●片岡吉雄

笛方森田流。8月3日、心不全のため金沢市内の病院で逝去。享年84歳。片岡外与吉の長男。父及び寺井政数に師事。

日本能楽会会員(昭和47年以来)。

●二宮禎護

本名貞八。シテ方観世流。10月1日、脑梗塞のため東京都文京区の病院で逝去。享年83歳。大正5年愛媛県宇和島市に生まれ、昭和7年浅見重寿に入門。浅見重信・藤波紫雪・藤波重満に師事。昭和31年〈石橋〉(乱)、38年〈道成寺〉を披演。

勲八等桐葉章受章。日本能楽会会員(昭和50年以来)。

●山本眞義

前名眞賀。シテ方観世流。11月4日、食道ガンのため大阪府吹田市の病院で逝去。享年69歳。昭和6年9月3日、山本博之の三男として大阪に生まれ、31年の〈道成寺〉披キを機に観世雅雪・観世寿夫に師事。兄の勝一、弟の順之らとともに活躍、58年には〈定家〉の舞台成果で大阪文化祭賞を受賞。補巖寺の世阿弥碑建立にも尽力された。日本能楽会会員(昭和47年以来)。